

国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー7 Susan L. Lytle. (1991) Living Literacy: Rethinking Development in Adulthood.

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 花 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000104

Susan L. Lytle. (1991)

Living Literacy: Rethinking Development in Adulthood.

富岡 花

監修：角 知行

2023年10月31日

1. 序文 【問題提起・論文概要】

Lytleは、これまで「非識字者」と言われる成人が「不完全な大人」と捉えられたり、ホームレスと犯罪、貧困、暴力などというイメージと結び付けられたりして、偏見があることを問題提起している。加えて、成人学習者の識字発達に関する知見が未だ限られていること、成人向けの識字プログラム内外で見られる学習の範囲と変動についてもまだ十分明らかにされていないと述べる。こうした問題に答えるため、本論文で筆者は主に3つの主張をし、それらを検討する。

- ① 非識字者の可能性とライフスタイルに対するこれまでの仮説、矛盾するリテラシーの概念を問い合わせ直し、成人学習者と教育者が学習をどう捉えているかを検討する必要がある。
- ② 成人期のリテラシー発達の様々な側面を捉えるための概念的枠組み（フレームワーク）の構築が必要である。
- ③ その理論形成の過程で「方法」を問題化する必要がある。（例えば、具体的には、調査者と被調査者の新しい関係を構築する必要を提言する。）

本論の第1節「Issues and Assumption in Rethinking Development」では、上記の①について詳しく論じている。先述した成人学習者に対する偏見とこれまでのリテラシーの捉え方を、先行研究を引きながら問い合わせ直し、改めて本論のもととなる問題を指摘し、それに取り組む必要性を主張する。第2節「Dimensions of Literacy Development in Adulthood」では、②について論じ、成人学習者向け識字プログラム（Adult Literacy Evaluation Project(ALEP)プログラム）での実践研究をもとに成人期のリテラシーの発達の新しい概念的枠組みの構築につながる、リテラシー発達の様々な側面を論じる。第3節「Researching Adult Literacy Development as Praxis」では、③について述べている。第2節で明らかに

なったことから、これから実践研究のあり方、調査者と被調査者の関係などについて論じる。第4節「Conclusion」では、本研究のまとめと意義を述べている。

2. Issues and Assumption in Rethinking Development (課題と前提) 【提起した問題の詳述と検討・その問題に取り組む必要性】

この節で筆者は、識字能力を伸ばすことが成人にとって持つ意味の理解を深めるためには、学習者としての成人、リテラシーの性質、学習の意味（目的）をどう捉えるかについてのこれまでの仮説を再検討する必要があることを示している。

2.1. Portraying Adults (成人の描写)

実際に識字教育のプログラムに参加する学習者は、「非識字者」に対するこれまでの偏見や負のイメージとは異なり、堂々としており、知性を持ち、多様であることが近年の研究 (Fingeret(1989) 等) で示されるようになってきたと筆者は説明する。このことから、積極性と理解力に欠ける人たちのために識字プログラムをつくるべきだという思い込みや前提を問い合わせ直す必要があると論じる。その上で、成人のリテラシーの発達を理解するために必要なのは、様々な文脈の場面での識字の機能と使用を検証することであり、識字プログラムの教室外での経験にも注目する必要があると述べる。また、筆者は、文字の習得には様々な過程があり、異なる文化や社会集団では、学習は個人の主体性や行動力よりも、他者との協働と相互依存によって成り立つかもしれないと考える。そして、その場合、読み書き能力の向上には、必ずしも理論的研究の多くが示唆してきたような、自主性（オートノミー）や自発性を必要または支持していないかもしれないとする。

2.2. Locating Literacy (リテラシーの位置)

ここで筆者は、リテラシーの2つの捉え方、「スキルとタスクとしてのリテラシー」と「実践と批判的内省と行動としてのリテラシー」を検討し、前者を批判し、後者を評価している。

リテラシーを中立的で客観的なスキルの集合とし、社会的な文脈から切り離して捉える考え方や教育方法は批判されてきたが、未だにそうした考え方は広く残っていると筆者は説明する。例えば、成人の「機能的なリテラシー」を小学4年生から中学2年生程度の読解能力や地元新聞が読める程度の力と捉えられる。このようにリテラシーを普遍的、認知的、技術的スキルの集合として、単一で階層的だとする捉え方が、「非識字者」といわれる成人が欠陥を持ち、読解力に欠ける人たちだという見方につながると筆者は批判する。また、リテラシーを機能的なタスクとして捉えて、評価することにも矛盾があり、その批判にも言及している。タスクとしてのリテラシーは、日常生活のなかでの活動のパフォー

マンス（成果）と捉えられることもあり、文脈に応じて、それぞれの集団のニーズや特性を踏まえてタスクを位置づけることもある。しかし、読み書き能力が文脈固有であるとしながらも、評価する際は、全員に同じ規定の場面とタスクを与えて行われる。このようにタスクとしてリテラシーを捉えることには矛盾があり、批判もあることを筆者は指摘する。

その一方で、実践と批判的内省・行動としてのリテラシーを評価している。労働者階級の成人コミュニティや家庭内の識字実践を調査した Heath(1983)の研究を紹介し、「読み書きができるようになり、識字者になるというのは、知識や経験を用いて世界を理解し、行動することである」(p.115)と筆者は論じる。そして、「リテラシーは、人の特徴や特性ではなく、様々な目的のために人が参加する多様な活動の『実践』である。この観点は、社会システムと文化システムの複雑な相互関係のなかで各個人が機能することを示唆する」(p.115)と主張する。また、「実践としてのリテラシー」と関連する「批判的内省と行動としてのリテラシー」は、「世界を解釈し、社会的・文化的に構築された価値観、行動、信念を認識するプロセス」(p.116)であると説明する。

2.3. Constructing Learning（学習の構築）

実践と批判的内省・行動としてリテラシーを捉える観点は、識字教育プログラムが学習をどのように構築するかという新たな問題を提起する。筆者は、これまでの多くの識字教育プログラムが、学習者のニーズに応えることを成人教育の目的として、カリキュラムを形成してきたことに問題視する。Brookfield(1986)の主張を引用しながら、「単に成人のニーズに応えるのではなく、学習者がより多くの情報を得た上で選択ができるように、成人教育は『多様な考え方と行動のとり方』を提供すべきである」(p.118)と筆者は主張する。このことから、プログラムのスタッフ、教師、チューターだけでなく、学習者も協同的にプログラムのカリキュラム形成からその運営と管理に参加し、リテラシーを育む機会を共に提供する「参加型」アプローチを評価している。伝統的なプログラムで受け身の立場であった学習者は、参加型教育ではプログラムの意義を明確にし、プログラムを創造し、維持する存在となると筆者は考え、日常生活の中で成人学習者が成し遂げられる力を再確認できるだろうと、このアプローチに期待を示している。

3. Dimensions of Literacy Development in Adulthood（成人期のリテラシー発達の側面（次元））【調査方法・内容】

本節では、教師と成人学習者が共に成人学習者の学習を調査した協同的なプロジェクト、Adult Literacy Evaluation Project(ALEP)での実践調査をもとにリテラシーの発達を4つの側面（次元）¹から考察し、新しい枠組みの構築のためのヒントを示している。4つの側

面（次元）は、成人学習者のビリーフ（Beliefs）、実践（practices）、プロセス／成果（processes/products）、目標／計画（goals/plans）である。

3.1. Adult Learners' Beliefs（成人学習者のビリーフ）

学習者のビリーフとは、言語、リテラシー、教育、学習に関する成人学習者自身が持つ理論や枠組みのことである。成人学習者のビリーフは、他の側面（次元）にも影響を与えるものであるため、4つのなかでも中心的なものであり、リテラシーの向上につながる重要な側面（次元）である。成人学習者のビリーフによっては、リテラシーの発達を難しくするものもある可能性があり、ビリーフを理解するには、そのビリーフを抱くようになった経緯に注目する必要がある。多くの場合は、学校教育での経験にあると考えられる。また、学習者と教師のビリーフが一致しないことにより、学習に影響を与えることもあるが、その不一致に気づき、それを表現することで、学習と成長のきっかけや文脈を与えるだろうと筆者は考える。

筆者はビリーフの変化を記録することによって、2つの問題が明らかになると述べる。それは、1.多くの成人が経験する、自分のなかに潜む「読み、書き、教育、学習」に関する思い込みを表現する難しさ、2.こうした変化を促し、解釈する調査者（教師・教育実践者を含む）の適切な役割である。この二点は今後の分析にも役立つと筆者は考える。

学習者のビリーフの変化には、リテラシーやその文化的な使用と効果に対する批判的な視点が含まれることもある。また、ビリーフの変化が学習計画の改善や日常生活のなかでの読み書き実践の過程やパターンにも反映されるかもしれないと筆者は考え、学習者のビリーフがリテラシーの発達の重要な側面（次元）であることを示した。

3.2. Literacy Practices（よみかき実践）

2つ目の側面（次元）は、よみかき実践であり、これは学習者の日常生活のなかで読み書き活動の範囲と種類をさす。また、成人が個人的あるいは協同的に何かしらの形の書き言葉を使用する文脈も含む。特定の文化集団でのよみかき実践を詳細に調査したエスノグラフィー研究のうち Reder(1987)の研究からは、「コミュニティの環境の変化がリテラシーの使用とその発達に影響している」（p.124）ということが分かる。さらに、Reder は正式な教育の場以外での人々のよみかき実践を観察したことで、各個人が生活のなかで新たに認識したニーズに、自発的によみかき能力を獲得していることが様々な場面で見られた。このことから、「識字プログラムに参加している成人の変化が必ずしもプログラムでの学びを反映しているのではなく、また、プログラムに参加している個人が静止した環境のなかで生きていると仮定すべきではない」（p.124）と筆者は主張する。

つまり、成人学習者は、様々なよみかき実践を識字プログラムの場に持ち込んでいる。学習者のよみかき実践によっては、教師や実践者・調査者のよみかき実践と文化的に異なったり、新しかったりすることがあり、学習者の独特な生き方と学び方をオープンに受け入れる姿勢が教育者と実践者には求められると筆者は指摘する。成人のよみかき実践は、変化していくものであり、その変化は、ライフパターンの変化にも反映し、識字プログラムの教室での役割をはじめ、コミュニティのなかでの役割の変化にもつながる可能性がある。

3.3. Reading and Writing Processes (読み書きのプロセス)

リテラシーの発達の3つ目の側面（次元）は、成人が口頭と文字言語をどのように使用するかの読み書きのプロセスである。ある読解タスクを遂行するための方法のレパートリーと、その過程での相互作用の成果のことである。筆者は実践（practices）が学習者の日常生活に関わる幅広いリテラシー活動を指すとしたら、読み書きのプロセス（processes）は「マイクロプラクティス（micropractices）」だと述べる。つまり、学習者がテキスト（自分と他者のテキスト《文字情報》）と行う、より具体的な相互作用のことであると筆者は説明する（p.126）。読み書きのプロセスでは、学習者の読み書きに関するビリーフとその他の要素も影響していると指摘する。学習者は、異なる目的、タスク、内容、文脈によって、関連する言語のプロセスが変わるか変わらないかの自身の知識を読み書きの実践に持ち込んでいる。

読み書きのプロセスを明らかにする方法として、筆者は、読み書きタスクに取り組む際に学習者が示す反応や行動を観察可能にする思考発話法（think-aloud reading protocol）やインタビューを挙げている。そして、その方法により、リテラシーのプロセスを明らかにし、研究者に限らず、学習者にもその議論と分析を可能にさせると説明する。

3.4. Learners' Plans (学習者の計画)

4つ目の側面（次元）は、学習者の計画（plan）である。これは学習に対する学習者の全体的な目的（意図）やより具体的な目標など、学習者が自ら何を学びたいか、また学習指導の文脈のなかで学習を実現させるための方法を捉えようとする側面（次元）である。識字教育プログラムに参加する成人学習者は、ただ「上手に読める人」になるためだけではなく、特定の目的や相手とのやりとりのために達成したい読み書きタスクに興味を持っている。こうした多くの学習者にとって、識字教育プログラムは、自身の学習を自分でコントロールし、自分の学習の主権を持てるようにする場となりえる。また、プログラムに参加する学習者には、自尊心を高めたいという希望が彼らの目標に（明言されている目標も、されていない目標にも）潜在している。

学習の目標設定や計画の過程の中心となるのは教師と成人学習者の役割であり、それぞれの考え方や方針などによって計画や目標、学習の実践は左右され、学習が進むにつれ学習計画も再設計される。筆者は、その過程で現れる新たな学習課題が、このリテラシーの発達側面（次元）「学習者の計画」のソースとなり、発達につながると考える。

学習者の学習計画は様々な形で変化する様子が見られる。筆者は、ALEP での学習者とのインタビューからその変化をいくつか紹介している。例えば、学習者が自分の学習をコントロールする力を持つようになり、自ら学習の目的と方法を選択するようになった。筆者はこの事例から、成人学習者にとって、自分の学習計画に対する選択とコントロールを持つことが学習の過程で非常に重要であることを指摘している。他には、教師と学習者のそれぞれの学習目標の相違が 2 人の異なる学習ビリーフに基づいていたからだった事例も紹介した。

この事例と分析を通して、筆者は ALEP のように参加型アプローチの評価の過程は、学習者に自分の過去と現在の読み書き経験を振り返って分析することを促すため、学習者の思い込みを問い合わせし、新しい可能性を確立することにもつながるのではないかと考える。自身のビリーフを問い合わせする機会が、新しい目標の設定、その目標の達成のために何が必要かをより意識したり、計画のなかで新しい優先順位をつくったりするなどの学習計画の変化をもたらすと筆者は述べる。このように、目標の変化は、他の次元（側面）の変化と反映することもある。例えば、プログラムの内外での経験や他者との交流を通して獲得した書き言葉の機能や形式に関する知識の変化によって、目標は変化する。

以上が教師と学習者との協同的な実践調査から検証したリテラシーの発達の 4 つの側面（次元）である。筆者は、本節で明らかにしたことを踏まえてさらに次の課題を提示した。それは、成人の「生きたリテラシー」の新しいイメージ構築には、何を発達と捉えるかの見解だけでなく、調査の方法（つまり、概念的フレームワークの構築、記述、批判の過程）を問題にする必要である。

4. Researching Adult Literacy Development as Praxis（実践として識字の発達を研究すること）【新たな課題】

質的研究では、度々、調査者によって解釈の捉え方が異なることや、調査者の存在をどのように位置づけるかなどが問われてきたことに筆者は言及している。それを踏まえて、実践研究としてリテラシーの発達を研究するうえで、被調査者（学習者）が自身の知識とリテラシーとどのように向き合うか、および調査者と被調査者との新しい関係について考える。

4.1. Adults and Their Own Literacy and Knowledge (成人と彼ら自身のリテラシーと知識)

学習者が調査に協力し、被調査者になることによって、調査が学習者にもたらすものは何か、「誰の知識基盤が、何の目的のために築かれているのか」(p.132)と筆者は問う。その問い合わせに対し、筆者は、Lather(1986)や Auerbach & Wallerstein(1987)等の指摘を紹介し、「学習者は自らの学習の主体となることで、自分について、かつ自分のために知識を得ることができる」と考える。例えば、インタビューをされるという経験は、被調査者の語りが自分の経験を整理し、その意味を見出すことに役立つ。自分の言葉で自分を語ることが、さらなる内省と行動の可能性につながるのだと筆者は主張する。

4.2. The Researcher and the Researched (調査者と被調査者)

Lather(1986)や Mischler(1986)等は、調査者と被調査者との新しい関係をつくる調査方法を提案してきた。その調査方法では、被調査者が調査結果と分析に深く関与している関係性が見られた。ここで筆者は、こうした調査方法では、「誰が（調査の）主権を持っているのか」疑問を投げる。また、実践者・調査者の問い合わせが被調査者の学習者にとって本質的価値と意味を持つのかは明らかでないと、いくつかの疑問を述べている。

その一方で、教育の過程でこうした調査が取り組まれることで、プログラムのカリキュラム形成やプログラムの実施に役立つかもしれない筆者は考える。そして、Lather や Mischler などが提案した調査方法が調査者の役割と目的の従来の定義を根本的に変化させると考える。調査のプロセスは、調査者と被調査者の両者が「変化するものと変化されたもの」となるように、「双方にとって教育的」であるべきだと主張した Lather の考えは、現在の成人リテラシー研究での調査者の捉え方とは対照的であると筆者は評価している。現在の研究は、調査者の役割を部外者（アウトサイダー）、参加者・観察者として、見えない存在、または被調査者が自分の経験と考えを世界に伝える媒体と捉えている。筆者は、カリキュラム開発、評価、プログラム管理における参加型形態への強い関心と高まりを背景に、成人学習者、教育者、研究者との新しい相互関係を構築する機会があると考える。そして、調査の方法によっては、得られる成果も大きいと主張する。

5. Conclusion 【まとめ（結論・便益）】

本論文では、成人期のリテラシー発達の理解を深めるために、これまでの「非識字者」に対する偏見と捉え方、リテラシーの概念的枠組み、成人期の学習の理解を問題提起し、それらの再検討が必要であることを主張した。以上3つの研究課題を設定し、それに基づく情報を得るために、成人のビリーフ、実践、プロセス、計画の4つを包含する、より豊かな概念的枠組みを構築する必要があることを示した。そして、理論形成と調査の過程

で、成人学習者が自身の知識とリテラシーとの新しい関係を築く必要があること、また、調査者（教育実践者）と被調査者（学習者）との新しい関係を築く必要があることを明らかにした。

Lytle の本論文の成果は、既存の成人「非識字者」に対する考え方とリテラシーの捉え方、それから、成人にとっての学習を問い合わせ直し、新しい概念的枠組みの土台を作ったことだと言える。そして、それはその後の成人リテラシー研究、識字プログラムのカリキュラム形成と実施などにも役立つであろう。Lytle も記述しているが、「概念的枠組みの使用とその修正を繰り返すことで、教育者、研究者と世間一般は、家庭内、職場、そしてコミュニティ内でリテラシーが「生きている」ものであるという理解を深めるかもしれない」(p.112)。また、実践研究のあり方にも言及していることから、教育分野での実践研究のあり方の参考にもなると考えられる。

注

- 1) Dimension（側面／次元）の定義：「Dimension という言葉は、しばしば品質や特質のような「人の中にあるもの」を指すが、人間の行動によって構築される文化的、社会的文脈も包含している。つまり、リテラシーの発達の dimension は、構成要素でも連続体でもなく、むしろ時間と空間における複雑な相互作用のある平面のようなものなのである」(p.120) と筆者は、ここでこの語の定義を示しているが、日本語訳としてどちらが適切か、判断できなかったため、「側面（次元）」と記している。

本文献レビューは、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。